写真 18　民家③

写真 19　民家④

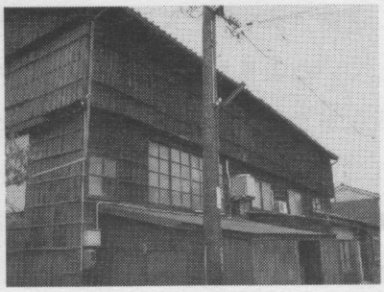

写真 20　民家⑤(閉鎖小工場か)

Ⅳ 人と街

1）教育

江戸時代中期より庶民階級にも学問が身近になりだすと，雑賀にも「算術方」という和算学校ができた。以来多くの教育所ができ，雑賀は独自の人材を輩出するようになった。雑賀は元来足軽街であり，子供達に学問をさせ身を立てるように，教育に熱心な雰囲気が伝統的にある。そうしたなかで，地域には一体となり教育を実践する雰囲気が生まれ，小学校ではしつけ教育が重んじられた。雑賀出身者は小学校に対し大きな愛着を持っているようでもある。雑賀地区からは，岸清一（1867 年～1933 年：国際弁護士・大日本体育協会会長）や若槻礼次郎（1866 年～1949 年：内閣総理大臣）等が出ている。

現在の教育中心となる雑賀小学校では，地区の人口流出と連動して児童数減少が著しくなってきていた。近年地区周辺校区内に集合住宅ができ，そこからの児童数が一定数確保されるようになり，減少の速度は落ちてきているが，増加の目処はない。

2）コミュニティ

雑賀町は例にもれず高齢化が進んでおり，高齢者率は現在 27%前後である。しかし，地域内での住民同士の交流は比較的多く，近所付き合いも多くあるようだ。この地区は細道がそれ挟んで目の前，そして隣接して左右に家があるため，近所付き合いを助けているという。区域内には医院が各種あり，高齢者にとっては比較的住み易い街である。地域の中心にある公民館では，各種行事が催され住民交流の場となっている。地域では若年層を呼び戻そうという取り組みもされているが，住民同士の連帯感や愛着を強め，和やかに住めるような行事を催している。

雑賀出身者は愛着意識が高く，地域に誇りを持っている人が多い。小学校は地域共同体の象徴として，そして現実的な機能を持っている。卒業生会は精力的に活動し，地域教育・郷土史等に力を注いでいる。運営には地域の高齢者も積極的に参加している。

Ⅴ 結

本調査では当初雑賀地区内の区割の変化を詳述するつもりであったが，資料の不備からその変化の外郭を見るに留まることとなった。江戸時代に作られ四百有余年の比較的短い歴史であるこの地区で

は，道路（排水溝）による古い街区はほぼ一定ではあったのだが，各地域内での住居区割の変化が想像していたよりも大きかった。度々の災害や建て替えによるものばかりではなく，住民の転入出による変化が意外に激しい。住民の変化は江戸時代の資料に示された持ち主氏名の変化を見ても大きい。そうした中でも地域出身の住民の中には，雑賀地区に対するある種の愛着のようなものが感じられる。本調査で多く参考とした『雑賀の今昔』もその作成編集等に地域住民の多大な協力が伺え，執筆者も雑賀町出身の人によるものが大きく，地域への愛着というものがひしひしと伝わってくる。

歴史的街区の中で，人々は能動的に生活している。雑賀の未来について，「地域住民が“いいところ”と思える街にしたい」「高齢者でも近所と仲良く支え合い，安心して住める街にしたい」といった意見が聞かれた。そして若年人口については「子供から高齢者は元気をもらうので，子供達の笑い声が街角で聞かれるような街になったらなお嬉しいな」という意見も共通して聞かれた。雑賀町は歴史的街区の上には立っているが，人々の意識は歴史の中に留まることなく時代に合わせて変化している。そしてその傾向はこれからも変わらないだろう。

《付記》

本調査では聞き取りにおいて，西尾繁氏（『雑賀の今昔』編纂者）ならびに福岡修之氏（雑賀公民館長）に特に御協力を戴きました。ここに記して感謝申し上げます。

文献・資料

雑賀郷土史編纂実行委員会（1991）：『雑賀の今昔』

島田成矩（1985）：『松江城物語』山陰中央新報社.

脇田祥尚/田中隆一(1999)：城下町を基盤とした近代都市計画の展開.『都市計画論文集 34』pp.577-582.

享保頃雑賀町古絵図（松江市史付録）

出雲国松江市街之図（松江市史付録）

延享年間松江城下古図（松江市史付録）

ゼンリン住宅地図（1972／1975／1988／1996／2000）

二万五千分の一地形図「松江」（1936）

松江市街図（昭文社，1969）

松江圏都市計画図 15（国土基本図）（島根県，1998）